義はトルコ語に於て解すべきものとすれば、當時魏にトルコ語が入つて居たか、或は元來兩者同一の語を有して居たものか、或はまた魏の語がトルコに傳はつたものか、三者何れかその一つであらねばならぬ、何れにしても蒙古語に於て豁兒に兵仗・箭筒・櫜鞬の義なく、また契丹語などにもかゝる意味の存する徵證無き以上、これを蒙古に先立つて漠北地方一帶に勢力を振つたトルコ族の言語から傳へ入れたものと見て差支ないであらう。（因みに記して置くが此の語は人名としても祕史の中に現はれて居る）

いま一つの客卜帖兀勒（ケブテウル）即ち明譯の祕史に宿衞的と譯し那珂博士もこれに從はれた語については、自分はトルコ語の方から適當と思ふ解釋を求め得ない、尤もトルコ語中の Teleut には käptä- なる語があつて看守する（beobachten）の義を有して居るから（Radloff ibid. II, 1181）之に gur なる接尾語の添はつたものと見れば、宿衞に對する稱呼として適せぬではあるまいけれども、かゝる說明を付する爲には尙多くの語例に待たねばならぬし、之を蒙古語の kebtegur と見 kebte- 即ち横はる、臥すから發した語として宿衞なる語と關係ありと見得るから、强いて僅少な例證によりてトルコ語から釋くことは避けたいと思ふ。

上に述べた通り客失克（ケシク）なる語及び客失克の三部の名稱に就いては、客卜帖兀兒（ケブテウル）の一つを除いては皆古くからトルコ語に於てその用例があり、また蒙古語として說明せんには、その語義に於て從來譯せられて居るものと吻合しかねると思はれるものも、トルコ語として釋けば都合よく說明し得るとすると、之をトルコ語の蒙古語に入つたものと見ても差支ないと考へる、たゞに蒙古語に於て然るのみではなく、東胡民族の言語に就てもかゝる現象の少くないのは、曾て白鳥博士の東胡民族考の中に於て例證を示して居られる通りである、蒙古の古史に見えて居る語はす